



▲オープンのような。記念式典でのテープカットの中央は当時の愛知県知事・鈴木礼治氏

瓦文化をのせて船出する巨大な船▶をイメージした美術館の前で澤田さん(右)と金子さん(左)



三州瓦の産地としての伝統と誇りをみんなで守り、育てる。そして未来へ…。

かわら美術館

日本の文化になくなくてはならない瓦。高浜市は、江戸時代から三州瓦の産地として発展してきた。「市内外の多くの方に瓦の魅力を知っていただきたい」「市民の皆さんに瓦をとおして、まちへの想いを育てていただきたい」との願いを込め、生産量日本一を誇る“まちのシンボル”として、20年前の平成7年10月7日、かわら美術館が誕生した。

瓦文化について、考古学・歴史・美術といった多様な切り口で展示紹介してきたほか、美術・音楽・ものづくりワークショップの開催など、創作や鑑賞を楽しむ場、感性を磨く場、分野を越えた繋がり場として多くの市民に活用され、単なる美術館という枠にとどまらない活動を展開してきた。陶芸創作室やレストランも楽しみのひとつとして、市外の方の利用も多く、これまでの来館者総数は約95万人をかぞえている。

開館当初、静かなまちにはちょっとしたセンセーションがおき「見知らぬ人がゾロゾロと「鬼のみち」を歩いていくので、何ごとかと後をつけたら美術館に着いた。」という沿道住民の笑い話も懐かしい。小規模館ならではの個性ある展示会をめざし、人気のアニメーターの展示会の際は夜中からファンが並んだことも。

の個性ある展示会をめざし、人気のアニメーターの展示会の際は夜中からファンが並んだことも。

オープン当時から陶芸を指導する澤田朋大さんは「教室でたくさんの方と知り合いました。常連さんが公募展に入選したときは嬉しかったな。」と思いつつ。「三州瓦はおもしろく、産地でないといけないことも多い。地域の方から情報や知識をもらっています。」と言うのは学芸員の金子智さん。美術館を舞台にした文化の交流や研究成果の蓄積もまちの財産となってきた。

高浜市が美術館のあるまちになってから生まれた世代も成人する。授業や遠足で自分のまちの美術館に来た方には、感性の中に、このまちならではの何かがきっと刻まれているはずだ。

“撮っておき” の たかはま

【第43回】

「ひと」「もの」「文化」などなど、有形・無形を問わず、高浜市の日常の暮らしの中にあるとっておきの「お宝」を紹介します。

LEIA A PÁGINA EM PORTUGUÊS!

ポルトガル語のページを読んでください！(P24)



早期配布にご協力ください。

編集・発行／高浜市役所総合政策グループ

〒444-1398 愛知県高浜市青木町四丁目1番地2

TEL (0566) 52-1111 FAX (0566) 52-1110

<http://www.city.takahama.lg.jp/>

電子メール info@city.takahama.lg.jp



VEGETABLE OIL INK 広報たかはまは植物油インキを使用しています。